



紙飛行機と私

会員 松田 浩明 <45期>

「木村杯」という紙飛行機の競技会がある。これは、初の国産旅客機YS-11の生みの親、故木村秀政博士が創設された大会である。開催回数は44回を数え、紙飛行機の世界では権威のある競技会のひとつだ。

私は昨年、紙飛行機を始めて30年目で、遂にこの木村杯に優勝することが出来た。キャリア30年といっても、中間に20年以上のブランクがある。それでも嬉しくて、あちこちで自慢していたら、LIBRAに原稿を書くことになった。それがまた嬉しい。

競技に使用する紙飛行機は、厚手のケント紙が材料だ。切り抜いた部品を、セメダインCで貼り合わせたペーパーグライダーである。大きさは、30～40センチくらいの翼長とするのが最近の流行。それなりに航空力学に基づいた計算と、試行錯誤を繰り返して、自分で設計する。これを、風や気流を見極めて飛ばして、滞空時間を競う。

私が優勝したときの滞空時間は、フライト5回の合計で263秒だった。1回の平均タイムは52秒強ということになる。動力を持たないペーパーグライダーでも、熱上昇気流にうまく乗せれば、2分でも3分でも滑空させることが出来る。ただし、競技会のルールでは、60秒超の飛行は、みな60秒としてカウントする。偶然に1回だけ強い上昇気流に乗ったことで、全体の成績が左右されるのは不公平だからである。私の場合、5回のフライトのうち3回が60秒超だった。

競技会には、飛行機の発進方法によって2つの部門がある。ゴムで射出する「カタパルト部門」と手で投げる「ハンドランチ部門」である。私が専門としているのはハンドランチ部門。選手としての私は



愛機と私と木村杯

「ハンドランチャー」だ。弁護士としての専門分野を問われ、いつも返答に窮している私だが、フィールドでは胸を張って、専門はハンドランチ、なのである。

試合に勝つためには、空力的にすぐれた機体を設計し、精度良く工作することが重要だ。それと同時に、気流の状況を体感し、タイミング良く狙った空間に投げ込むテクニックと、精神力も必要である。

インナーマッスルの鍛錬も怠ってはならない。加齢により全身の筋力が落ちている。20グラムくらいしかない紙飛行機を思い切り投げたら、自分の腕の重みで肩を壊してしまう。いわゆるルーズショルダーだ。それを防ぐため、細いゴムチューブを、毎日ちまちまと引っ張る。家族の冷たい視線にも負けてはだめだ。

ところで、私の紙飛行機への想いは、原体験のある少年時代の記憶と強く結びついている。それは、日暮れまで飛ばした故郷の原っぱの風景だったり、接着剤を買いに行った古い文具店の臭いだったりする。40歳のオヤジになった今、再び私は紙飛行機にとりつかれ、時折そんなものを思い出す。だから、この趣味はノスタルジアの一種かもしれない。